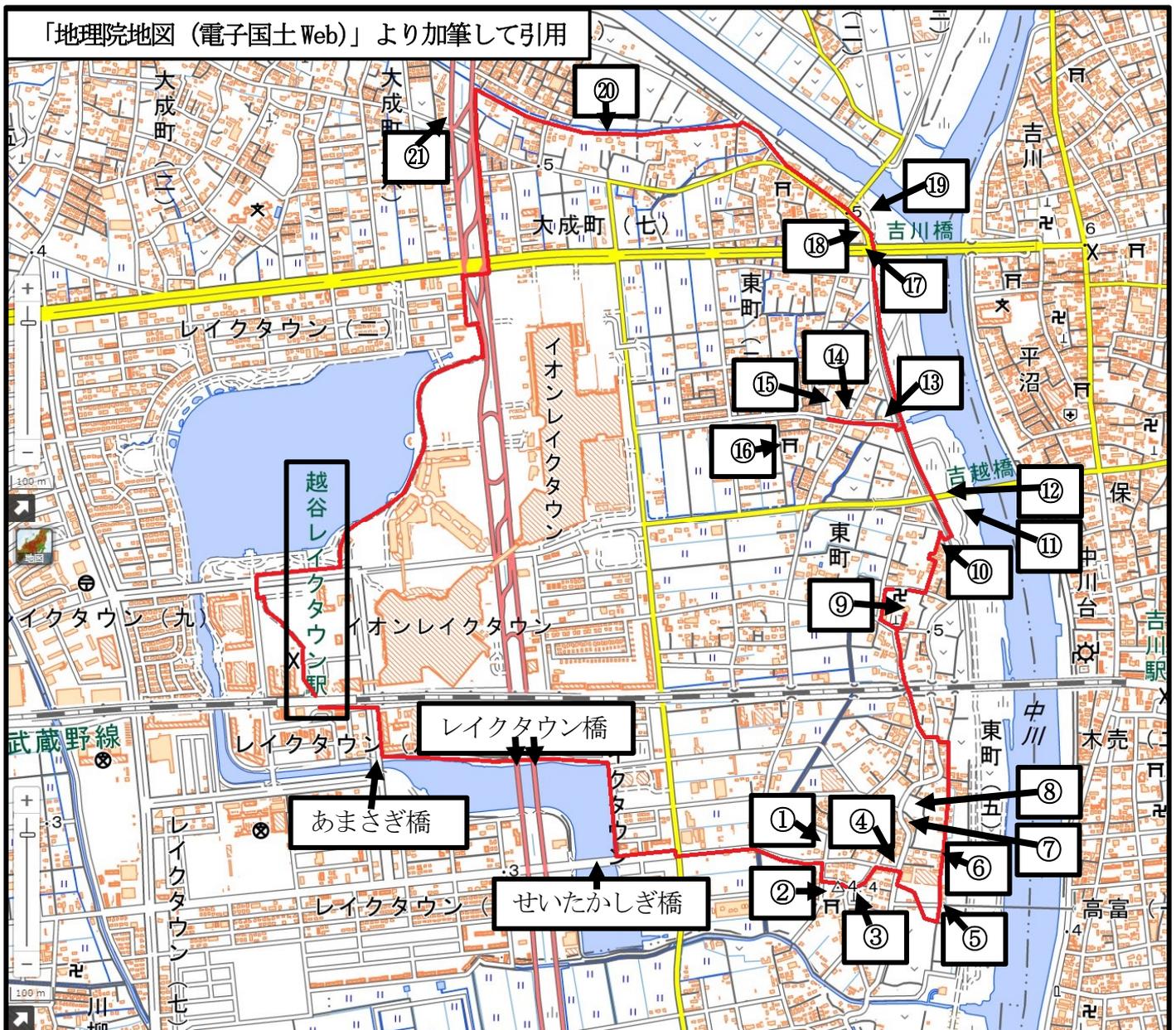


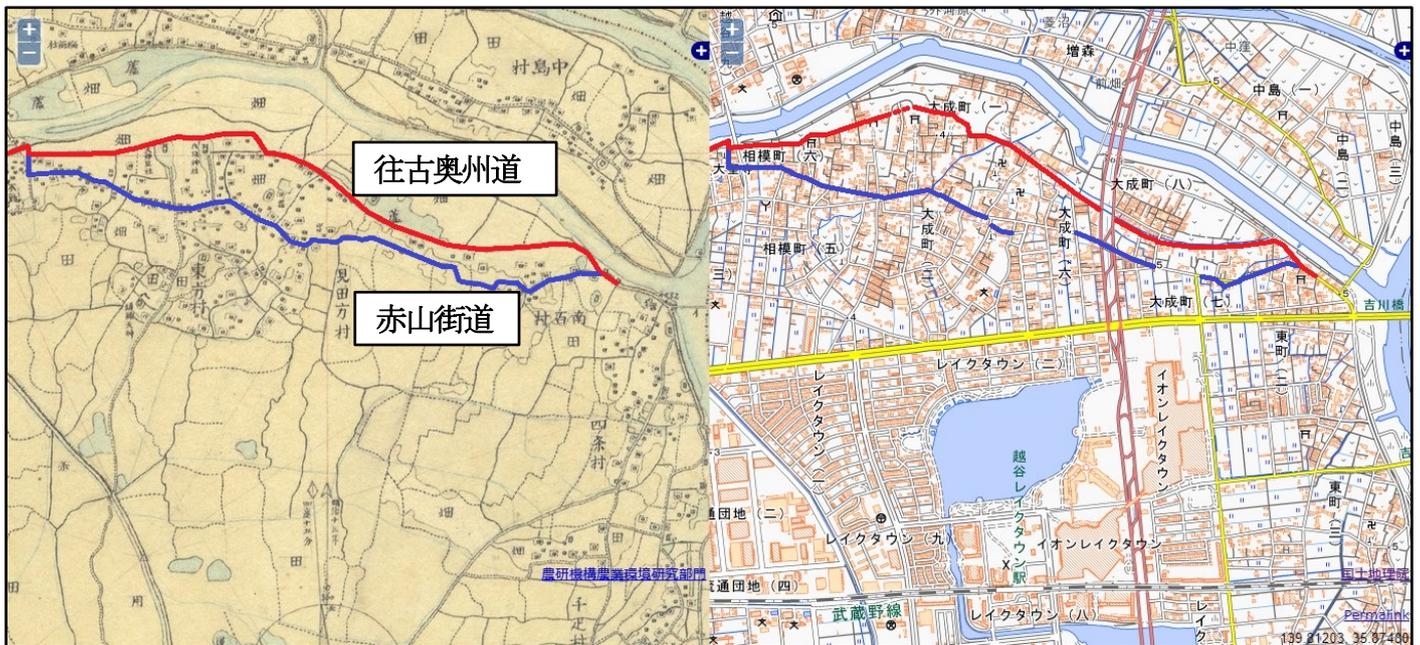
◎NPO法人越谷市郷土研究会
地誌研究倶楽部「巡検」

◎「越谷リバーウォークガイドツアー」
中川・元荒川沿いの「奥州古道」を歩く

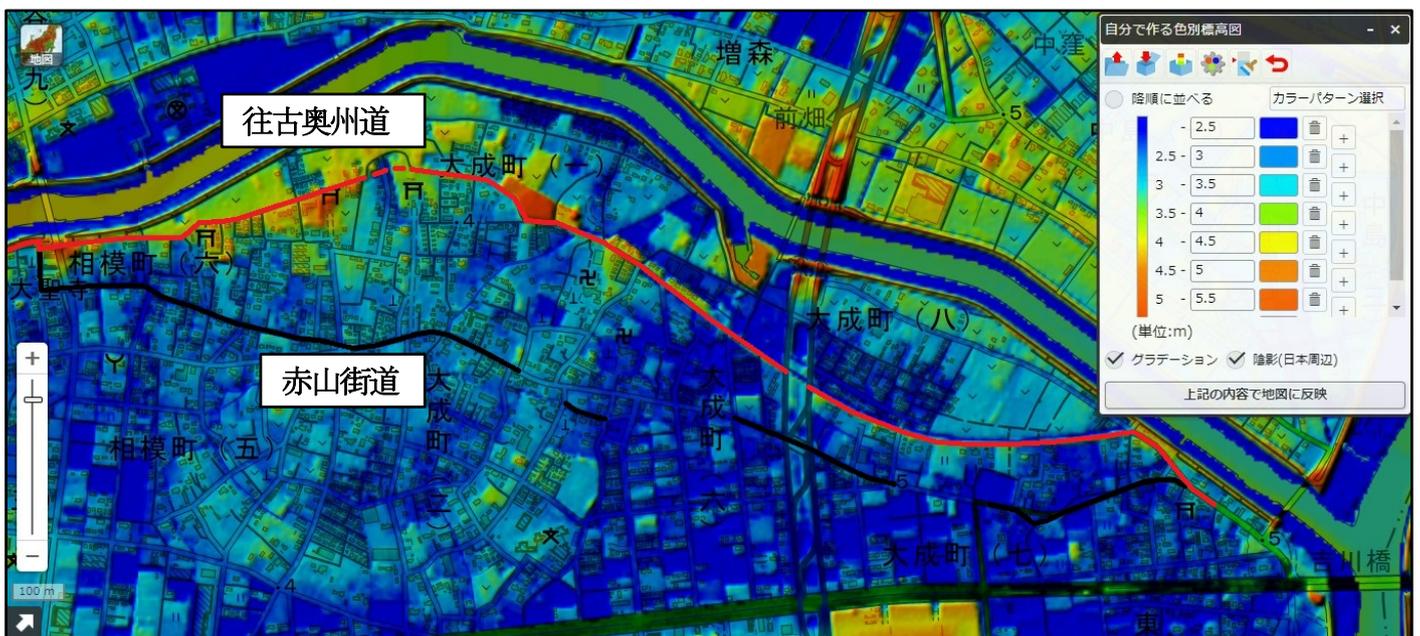
◎令和5年9月28日(木)

案内者：秦野 秀明





△ 農研機構 農業環境研究部門 「歴史的農業環境閲覧システム」
「比較地図」
向かって左は「迅速測図(明治13年(1880)測量)」
向かって右は国土地理院「地理院地図」
より加筆して引用：秦野 秀明



△ 国土地理院
「地理院地図(電子国土 Web)」
「自分で作る色別標高図」
より加筆して引用：秦野 秀明

○ JR武蔵野線「越谷レイクタウン駅」南口 集合

○旧 埼玉郡 八条領 千疋村

①新光寺跡地

「前と同（※ 秦野加筆 慈眼寺）末、本尊不動、」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「地図中の「新光寺跡」「氷川社跡」「薬師堂跡」の位置は、『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』八潮市、付図より推定した」

出典：①加藤 幸一（2015）「第458回 史跡めぐり 市内 南百・四条・別府・千疋を歩く」越谷市立図書館蔵

※以降は、加藤 幸一（2015）「史跡」と表記

②天保七年（1836）原図「千疋村絵図」

八潮市史編さん委員会編（1987）『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』

八潮市役所

②稲荷神社（伊南理神社）

「村の鎮守なり、柿木村萬福寺の持、」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「千疋村の鎮守である。ここに高さ133センチ（※ 秦野加筆 メートル）の「浅間神社」と刻まれた自然石の石塔がある。かつての富士塚の跡地である」

出典：①加藤 幸一（2015）『大相模地区 旧南百・四条・別府・千疋村石仏 平成27年2月改訂』越谷市立図書館蔵

※以降は、加藤 幸一（2015）『石仏』と表記

※「伊豆石」

本殿の「基壇」に「伊豆石」を使用。拝殿の「基壇」に「大谷石」を使用。

※「十二塚」

「ここは柿ノ木村（現草加市）との境にあたるが、神社裏には十二塚と称された塚があり、戦国期の戦死者を葬ったと伝えられるが、いまでもその一つが残されている」

出典：「現地の説明板」

③東養寺墓地（千疋南農村センター）

「新義真言宗、別府村慈眼寺（※ 秦野加筆 現 金剛寺）の末、利劔山と号す、本尊阿弥陀、」

出典：『新編武蔵風土記稿』

※「廿一仏板碑」

「附属資料」を参照。

④薬師堂跡地

「地図中の「新光寺跡」「氷川社跡」「薬師堂跡」の位置は、『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』八潮市、付図より推定した」

出典：①加藤 幸一（2015）「史跡」

②天保七年（1836）原図「千疋村絵図」

八潮市史編さん委員会編（1987）『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』

八潮市役所

⑤「新中川水管橋」

⑥古道（「下妻街道（江戸往来）跡」）

「江戸時代は「江戸往来」とも呼ばれ、江戸と下妻に通じる。日光街道ができる前の江戸時代以前からある奥州古道と思われる」

出典：加藤 幸一（2015）「史跡」

⑦氷川社跡地

「地図中の「新光寺跡」「氷川社跡」「薬師堂跡」の位置は、『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』八潮市、付図より推定した」

出典：①加藤 幸一（2015）「史跡」

②天保七年（1836）原図「千疋村絵図」

八潮市史編さん委員会編（1987）『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』

八潮市役所

⑧「庄次郎池」跡

「庄次郎池と云村の東字堤外下出州にあり東西二十間南北二十四間周囲八十八間深六尺其水流れて古利根川に入る」

出典：『武蔵国郡村誌』

「押堀」と推定。

出典：加藤 幸一 (2015) 「史跡」

※「中島」・「木売の渡し」跡

「中島」は、「附属資料」を参照。

○旧 埼玉郡 八条領 別府村

⑨金剛寺

「新義真言宗、下総国葛飾郡名都借村清瀧院末、稻荷山観音院実蔵坊と云ふ、開山善幸、天文十八年（1549）八月十五日、示寂す、本尊は正観音を安置せり、」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「金剛寺は、江戸時代に慈眼寺（じげんじ）と称していた。慈眼寺は、四ヶ領八十八箇所弘法大師霊場の六十三番札所である。

明治の頃になって四条村の妙音院や三輪野江村の東眼寺を合併して、金剛寺と名を改め、今日に至っている。

境内の太子堂は、隣の四条村の妙音院にあった太子堂を昭和二年（※ 秦野加筆 1927）に再建したものである。太子堂には等身大の聖徳太子像が祀られている。その像の中には、さらに体のない頭だけの太子像が胎内仏として納められている。多くの人々に信仰されてきたであろうこの胎内仏には次のようないわれが江戸時代の『新編武蔵風土記稿』に紹介されている。

霊験が著しかったとされるこの頭だけの聖徳太子像を遠く離れた千住宿に移した。ところが、地元の四条村や移された先の千住宿の住民の間に病気や災いをこうむるものが出た。そこで、これら尊像の意に反しておこなったからであろうとして元の妙音院に戻したという」

出典：加藤 幸一 (2015) 『石仏』

※「新四国八十八箇所弘法大師霊場」

「四ヶ領八十八箇所」ともいう。四ヶ領とは、澁江領、葛西領、二郷半領、八条領をさし、一番は西新井大師で、特に中川沿いに見られる」

出典：加藤 幸一 (2015) 「史跡」

※寛文二年 (1662) 「二童子庚申塔」

「この庚申塔は、一時は「さなえ幼稚園」の西方五十メートル先の南北の道路と東西の道路の交差点の北西付近[中略]にあったが、本来は金剛寺の裏（現在の駐車場）の小山の上に祀られていたものである。平成二十六年（※ 秦野加筆 2014）四月に本来の地の金剛寺に戻り、参道に移された」

出典：加藤 幸一 (2015) 『石仏』

※ 出典：秦野 秀明 (2023) 「試論「寛文二年 (1662) 二童子付き庚申塔」は「二猿付き庚申塔」である可能性が高い」

http://koshigayahistory.org/230411_nidohji_nien_h_hatano.pdf

「附属資料」を参照。

⑩久伊豆神社跡地

「村の鎮守とす、慈眼寺（※ 秦野加筆 現 金剛寺）持なり、」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「江戸時代には、別府村の鎮守である久伊豆神社が、□□家の東側の七・八十メートル先の土手道の内側にあった。

今はそこにはその名残が全くなく、千疋の稻荷神社に合祀されている。

また、一方で□□家の南側にある道路の南側路傍に久伊豆神社としての祠が設置されている」

出典：加藤 幸一 (2015) 『石仏』

※元禄八年 (1695) 「荒神様」石塔

「地元では荒神様として祀られている」

出典：加藤 幸一 (2015) 『石仏』

○旧 埼玉郡 八条領 四条村

⑪山王社（日枝神社）跡地

出典：加藤 幸一 (2015) 「史跡」

⑫天満宮跡地

出典：加藤 幸一 (2015) 「史跡」

⑬妙音院墓地 (※ 秦野加筆 現金剛寺 四条東墓地)

「新義真言宗、別府村慈眼寺末、猿青山観音寺と号す、本尊正観音、」
「太子堂 聖徳太子の自作を腹籠りとす、頭計にて体はなしと云 (太子像の胎内に太子の頭が胎内仏として納められている)、霊験著しく先年故ありて足立郡千住宿へ移せしに、当村 (四条村) 及び彼村 (千住宿) の者多く病災に罹りしゆへ、霊意に適はざるならんとて元の如く当村へ復せりといへり、村民の持なり、」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「[前略] 四条本田の墓地は、もとは妙音院と呼ばれた寺院があった所である。かつては四条幹排 (※ 秦野加筆 四条幹線排水路) の南側にも広がる敷地であったが、四条幹排の設置により分断された」

出典：加藤 幸一 (2015) 『石仏』

⑭個人所有 (久兵衛様) 墓地

「[前略] □□家 (「久兵衛様」) は、四条村の名主を勤めた家柄で、周囲には構え堀があった。

□□家墓地は、元は吉川橋 (※ 秦野加筆 旧 吉川橋) の東詰五十メートル南方の土手道西側にあった。かつては杉山に囲まれて大師堂もあったという。現在は中川の拡張により、根郷橋の北詰め、ポラス (※ 秦野加筆 (株) ポラス暮らし科学研究所) 側に移転された」

出典：加藤 幸一 (2015) 『石仏』

⑮「(株) ポラス暮らし科学研究所」

⑯日枝神社 (※ 秦野加筆 現日枝神社・天満天神社)

「村の鎮守、妙音院の持、下の四社 (天神社・稲荷社・弁天社・水神社)、持同じ、末社 稲荷」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「四条村の鎮守である。江戸時代は山王社とも呼ばれた。明治四十一年（※ 筆者加筆 1908）に村内の天神社と稲荷社を合祀している。日枝神社は、もと現在の吉越橋の南側三十メートル程先の中川河川敷にあったが、大正十年（※ 秦野加筆 1921）に中川改修工事のために土手道の内側の吉越橋の真下、天満宮そばに移転した。さらに吉越橋の建設敷地にかかるため天満宮とともに昭和六十二年（※ 秦野加筆 1987）に現在地に遷宮した」

出典：加藤 幸一（2015）『石仏』

※「伊豆石」

かつての本殿の「基壇」に使用されていたと推測される「伊豆石」が転用。

※「四条四軒家」

「吉川橋（※ 秦野加筆 旧 吉川橋）の西詰五十メートル南あたりから根郷橋あたりにかけて、小字名が「根郷」と呼ばれ、村の発祥地として推定される地域がある。

四条村の開発者と伝わる四軒の家、「四条四軒家」がある。寛永年間（1624～1643）頃には開発が始まったと思われる[中略]□□家は、寛文六年（1627）頃に来た□□家墓地（根郷橋そばに移転）には二代目以降を祀っている。□□家は、初代先祖の没年が承応元年（1652）となっている」

出典：加藤 幸一（2015）『石仏』

※ 秦野 秀明注

以下の2点の史料

○「史料1」

永禄十年（1567）七月十九日 太田氏資 書状（折紙）[平林寺文書]

「就其方御上洛、平林寺領馬籠并四条之村、横合狼藉不可有之候、恐々敬白、
[後略]

○「史料2」

天正十四年（1586）九月廿八日 太田氏房 判物（折紙）[平林寺文書]

「平林寺・大安寺・安楽寺之事、寺領馬籠并四条之村、

御隠居様如御証文無相違、横合非分不可有者也、仍如件、[後略]

出典：埼玉県編（1980）『新編埼玉県史 資料編6 中世2 古文書2』埼玉県により、旧四条村のあった地区は、当時、現さいたま市岩槻区に存在した「平林寺」の「寺領」であったことがわかる。

出典：加藤 幸一（2015）『石仏』により「寛永年間（1624～1643）頃が開発が始まったと思われる」と記載される「四條四軒家」は、「初代」の「開発者」ではなく、「再開発（中興）者」と推定されるべきである。

以上の秦野 秀明の指摘により、

出典：加藤 幸一（2019）『平成 31 年度図書館講座 大相模地区東部の歴史』
越谷市立図書館蔵

では、「根郷は開発が始まった地をさし、その四條村の再開発者が四條四軒家である」と記載が修正された。

○旧 埼玉郡 八条領 南百村

⑰長運寺跡地・（南百の）不動堂

「同（※ 秦野加筆 慈眼寺（現 金剛寺））末^{まつ}、本尊不動なり」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「お堂及び本尊の不動明王像は、もとはすぐ近くにあった長運寺（東町 2-195）より移転し、さらに中川の拡張により南百の墓地の南側の現在地に移転した」

出典：加藤 幸一（2015）『石仏』

⑱宝性院跡地

「新義真言宗、別府村慈眼寺（※ 秦野加筆 現 金剛寺）末^{まつ}、珠光山と号す、本尊大日^{しゅこうさん}」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「かつては「宝性院（ほうしょういん）」と称した寺院の跡地である。地元では「南百の墓地」と呼ばれている。現在は、柿ノ木にある東漸院（とうぜんいん）が管轄している。宝性院は足立区にある西新井大師（総持寺）を一番とする四ヶ領八十八箇所の一つで、六十一番にあたっていた。四ヶ領とは渚江領、葛西領、二合半（※ 秦野加筆 二郷半）領、それにここ八条領にまたがる四領をさす」

出典：加藤 幸一（2015）『石仏』

⑲水神社跡地・「荒川橋」跡地

「村の鎮守^{ちんじゅ}なり、宝性院持、下二社（※ 秦野加筆 第六天社、天神社）持^{もち}同じ」

出典：『新編武蔵風土記稿』

「水神社は平成十七年（※ 秦野加筆 2005 年）に元の地（中島橋の東方七十メートル、吉川県道に面した地）から東町 2-166 の□□家の西側の道路隔てた地に移転された（※ 秦野加筆 現在の所在地は東町 2-76-1）。南百村の鎮守である」

出典：加藤 幸一（2015）『石仏』

⑩古道（「奥州古道（堤土手）跡」）

※出典：①加藤 幸一（2012）

「江戸時代以前の越谷を通る古奥州道（一考察）（平成 24 年 9 月改訂）」
<http://koshigayahistory.org/349.pdf>

※出典：②加藤 幸一（2023）

「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道（令和 5 年 8 月改訂）」
http://koshigayahistory.org/230827_ohsyuu_kodoh_k_katoh.pdf

※出典：③秦野 秀明（2023）

「仮説「大相模郷」の地形は「元荒川（利根川本流）旧河道」が形成した」
http://koshigayahistory.org/230614_ohsagamigoh_h_h.pdf

※出典：④秦野 秀明（2023）

「「往古奥州道」は「大河の自然堤防（跡）上」の古道」
http://koshigayahistory.org/230624_ohko_ohsyuudoh_h_h.pdf

※出典：⑤秦野 秀明（2023）

「大相模郷の旧河道と自然堤防の推定を可能にした新たな手法」
http://koshigayahistory.org/230710_ohsagamigoh_new_approach_h_h.pdf

⑪「八塚」

「故・中村徳二郎氏の「大相模郷土史（昭和十四年（※ 秦野加筆 1939 年））によると、飯島にある八塚（やつか）地蔵の地蔵様が八坂神社に移されたとある。[中略] 八塚地蔵は、吉川県道沿いの北側の、大成町 8-473-6 の地を地元では八塚と呼び、多くの塚があったという。八は多いという意味で、中世の戦死

者の塚ではなかろうか。八条領西袋村名主の小沢平右衛門豊功の絵図からすると、江戸時代には塚上に地蔵堂があったと思われる」

出典：①加藤 幸一（2015）『大相模地区の石仏 旧西方・東方・見田方村 旧南百・四条・別府・千疋村石仏 平成27年2月改訂』
越谷市立図書館蔵

○ JR武蔵野線「越谷レイクタウン駅」北口 解散

A 「明治二十二年四月一日「市制町村制」による町、村名」

南埼玉郡 大相模村（旧 西方 東方 見田方 千疋 別府 四条 南百の七ヶ村）

① 「近世の宿、町、村、新田名」：千疋村 出典：『新編武蔵風土原稿』

① b 名称の変遷：千匹村→千疋村 出典：『新編武蔵風土原稿』

② 「近世の郡名・領名」：埼玉郡 八条領 出典：『新編武蔵風土原稿』

③ 「近世の管轄の沿革」：（記載なし）→阿部豊後守領（柿木領八ヶ村）
出典：『新編武蔵風土原稿』・『寛文印知集』

④ 「検地の年度」：寛永四年（1627） 出典：『新編武蔵風土原稿』

⑤ 「近世の小名」：記載なし 出典：『武蔵国郡村誌』

⑥ 「近代の字地」：

なへま	よしだ	しとまき	くしょうだ
苗間耕地	芦田耕地	四斗蒔耕地	九升田耕地
しょうごん	にまいだ	うきぬま	きたぐち
庄観耕地	二枚田耕地	浮沼耕地	北口耕地
みなみぐち	ていぐわいしも	でず	ていぐわいかみ
南口耕地	堤外下出洲耕地	堤外上出洲耕地	

中島耕地 出典：『武蔵国郡村誌』

A 「明治二十二年四月一日「市制町村制」による町、村名」

南埼玉郡 大相模村（旧 西方 東方 見田方 千疋 別府 四条 南百の七ヶ村）

① 「近世の宿、町、村、新田名」：別府村 出典：『新編武蔵風土原稿』

② 「近世の郡名・領名」：埼玉郡 八条領 出典：『新編武蔵風土原稿』

③ 「近世の管轄の沿革」：（記載なし）→阿部豊後守領（柿木領八ヶ村）
出典：『新編武蔵風土原稿』・『寛文印知集』

④ 「検地の年度」：寛永四年（1627） 出典：『新編武蔵風土原稿』

⑤ 「近世の小名」：記載なし 出典：『新編武蔵風土原稿』

⑥ 「近代の字地」：

			ていぐわい
前原耕地	西耕地	東耕地	堤外耕地

出典：『武蔵国郡村誌』

A 「明治二十二年四月一日「市制町村制」による町、村名」

南埼玉郡 大相模村 (旧 西方 東方 見田方 千疋 別府 四条 南百の七ヶ村)

- ① 「近世の宿、町、村、新田名」：四条村 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ② 「近世の郡名・領名」：埼玉郡 八条領 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ③ 「近世の管轄の沿革」：(記載なし) →阿部豊後守領 (柿木領八ヶ村)
出典：『新編武蔵風土原稿』・『寛文印知集』
- ④ 「検地の年度」：寛永四年 (1627) 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ⑤ 「近世の小名」：記載なし 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ⑥ 「近代の字地」：北谷耕地 深田耕地 待田耕地 六舛耕地 新田耕地
南百方耕地 古通耕地 根郷耕地 長嶋耕地 堤外耕地
出典：『武蔵国郡村誌』

A 「明治二十二年四月一日「市制町村制」による町、村名」

南埼玉郡 大相模村 (旧 西方 東方 見田方 千疋 別府 四条 南百の七ヶ村)

- ① 「近世の宿、町、村、新田名」：南百村 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ② 「近世の郡名・領名」：埼玉郡 八条領 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ③ 「近世の管轄の沿革」：(記載なし) →阿部豊後守領 (柿木領八ヶ村)
出典：『新編武蔵風土原稿』・『寛文印知集』
- ④ 「検地の年度」：寛永四年 (1627) 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ⑤ 「近世の小名」：記載なし 出典：『新編武蔵風土原稿』
- ⑥ 「近代の字地」：西妻 苗間戸 下深田 上深田 曾根 沖
出典：秦野 秀明 (2020) 「越谷地名大全 (明治二十二年四月一日まで)」
『古志賀谷』第19号 NPO 法人越谷市郷土研究会

◎附属資料

「山王二十一仏板碑」に関する資料

資料 (文献) ①

1975年 星野昌治 (1975) 「山王二十一仏板碑 (第五章 越谷の板碑)」

『越谷市史 一通史上』越谷市 pp. 377-385

- ① 総数 39 基、越谷市内 8 基 ※「恩間 743 板碑」の記載なし
- ② 「類型」第一類～第六類までの記載あり

③「紀年銘、所在地、主尊、供養銘、形状（高さ・幅）、備考等」の記載あり
1986年 星野昌治（1986）「越谷を中心に分布する山王二十一仏板碑」pp. 5-9
昭和61年11月「第18回市民文化祭」

①総数46基、越谷市内8基 ※「恩間743板碑」の記載なし

②「類型」第一類～第六類までの記載なし

③「紀年銘、所在地、主尊、供養銘、形状（高さ・幅）、備考等」の記載なし
1989年 星野昌治（1989）「山王二十一仏板碑について（加藤幸一氏代筆）」
p. 27, 28 平成元年4月「越谷市民ギャラリー（「市民まつり」の前身）」

①総数46基、越谷市内8基 ※「恩間743板碑」の記載なし

②「類型」第一類～第六類までの記載なし

③「紀年銘、所在地、主尊、供養銘、形状（高さ・幅）、備考等」の記載なし
1991年 星野昌治（1991）『板碑の総合研究 総論 増補改訂版』柏書房
pp. 267-303

①総数45基、越谷市内9基 ※「恩間743板碑」の記載あり

②「類型」第一類～第六類までの記載あり

③「紀年銘、所在地、主尊、供養銘、形状（高さ・幅）、備考等」の記載あり

◎以上の「4文献」の分析から判ることは、
1975年から1991年までの「16年間」に、
「山王二十一仏板碑」の「全国の総数」は、
39基から45基へ、6基増えた。

「山王二十一仏板碑」の「越谷市内の総数」は、
8基から9基へ、1基増えた。

1基増えた内訳は、「恩間743板碑」である。

資料（類型）②

星野昌治（1991）『板碑の総合研究 総論 増補改訂版』柏書房 pp. 267-303

①第一類 葛飾 南蔵院型 主尊 釈迦種子
中央縦列 上七社、その右列 中七社、左列 下七社の
各本地仏種子を縦三列に配す
全3基

※越谷市①：天文二十三年（1554）越谷市西方 田向墓地（旧武蔵国）

②第二類 関宿 薬師堂型 主尊 定めず

右（第一列）上七社、
中央（第二列）中七社、
左（第三列）下七社の
各本地仏種子を三列七段に配す
全5基（紀年銘不明1基含む）

③第三類 **越谷 薬師堂型** 主尊 **虚空蔵種子**
残り二十社の各本地仏種子を四列五段に配す
全14基（紀年銘不明4基含む）

（ヨコ型）13基

※越谷市②：永禄元年（1558）越谷市北越谷 稻荷神社（旧下総国）
同③元亀三年（1572）越谷市西方 道祖神社（旧武蔵国）
同④天正五年（1577）越谷市増森 薬師堂（旧下総国）
同⑤不詳 越谷市御殿町路傍（旧武蔵国）

（タテ型）1基

④第四類 **越谷 東養寺型** 主尊 **釈迦種子**
残り二十社の各本地仏種子を四列五段に配す
全9基（紀年銘不明1基含む）

（ヨコ型）7基

※越谷市⑥：天正三年（1575）越谷市（旧 東小林 76）（旧下総国）
同⑦：天正三年（1575）越谷市（旧 千疋）東養寺（旧武蔵国）
同⑧：天正六年（1578）越谷市増林 上組墓地（旧下総国）

（※ 秦野が再発見）

（タテ型）2基

⑤第五類 **柏 聖徳寺型** 主尊 **釈迦種子**
残り二十社の各本地仏種子を五列四段に配す
全2基

⑥第六類 **例外** 第一類から第五類までの類型のいずれにも属さないもの
全1基

⑦類型不明 全11基（紀年銘不明8基含む）

8, 23, 26, 33, 35, 37, 38, 39, 40, 41, 45（通し番号）

※越谷市⑨：23が、越谷市恩間 743（旧下総国）

川に存在する「島」は、しばしば「中島」、「中洲」と呼ばれる。古来より「中島」、「中洲」は、「蟻ありの熊野くまのもうで詣まうで」で有名な熊野本宮大社 旧社地「大齋原くまのほんぐうたいしやしきゅうしゃち」に代表されるように、「聖地」となっている例も多く、また、その地形上の特徴から、「渡しわた」の場所として選ばれている例も多い。

旧野島村のじまの浄山寺じょうざんじの付近も、明治十九年（1886）に完成した「迅速測図じんそくそくず」⁽¹⁾や、昭和二十年代に撮影された「空中写真」より推測すれば、かつては、元荒川（利根川本流）の「中島」、「中洲」であった可能性が高い。『野島浄山寺口伝書』⁽²⁾の内容からは、旧野島村のじまの浄山寺じょうざんじの付近の「中島」、「中洲」が、「聖地」であり、且つ「渡しわた」の場所であったと、読み解くことも可能である。

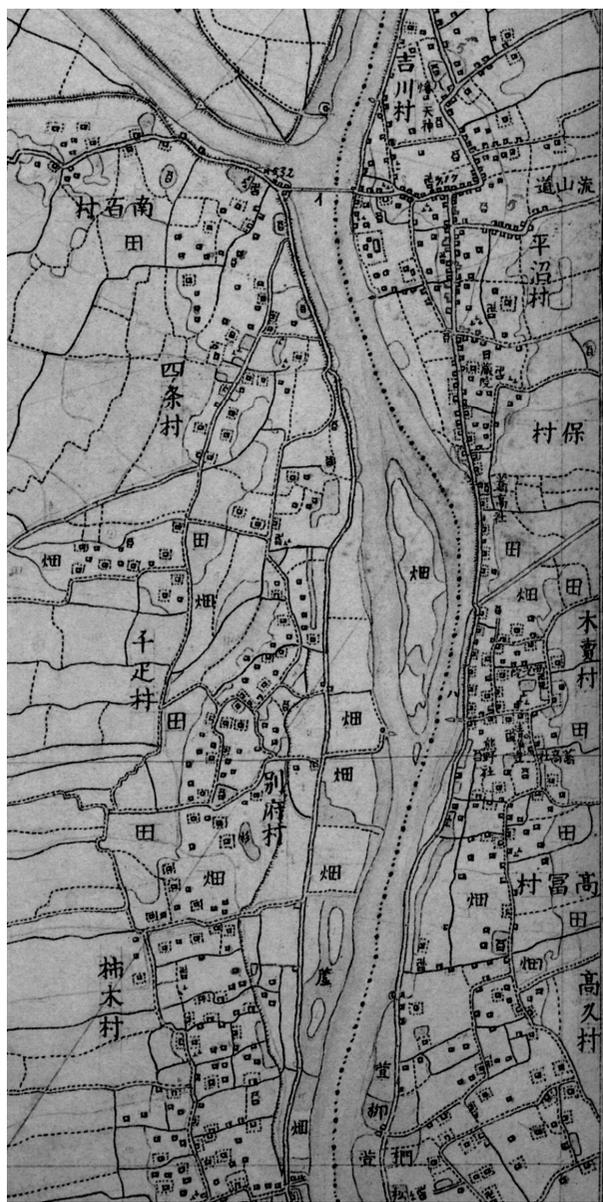
現在は河川改修によって消滅したが、越谷市近辺で最大級の「中島」、「中洲」として存在していたのが、旧千足村せんびきの「中嶋」である。現在の「主要地方道 52 号越谷流山線・吉越橋よしこし」の南から「JR武蔵野線・中川橋梁きょうりょう」の南にかけての中川に存在していた。天保七年（1836）原図の「千足村絵図」⁽³⁾には、「千足村中嶋」の文字が記載され、江戸時代後期と推測できる「絵図」⁽⁴⁾には、「千足村ノ内」、「洲」、「畑」、「百間」、「三百三十四間」等の文字が記載されており、「迅速測図」⁽⁵⁾では、正確な位置や面積等が読み取れる。また、明治十五年（1882）編さんの『武蔵国埼玉郡村誌 卷之二』⁽⁶⁾では、「中島耕地 村の東にあり東西一町南北六町」との記載がある⁽⁷⁾。管見の限りでは、旧千足村の「中嶋」には「寺社」は存在せず、畑地であったので、「聖地」であったか否かは不明であるが、かつては、旧千足村の「中嶋」のすぐ下流に、旧千足村と、対岸の旧木売村（現吉川市）の人びとや物資を運ぶ、「木売の渡しきうり わた」⁽⁸⁾が存在していた。

この中川に存在した旧千足村せんびきの「中嶋」は、大正五年（1916）六月三十日発行の地図⁽⁹⁾に記載され、昭和三年（1928）修正測図の地図⁽¹⁰⁾に記載されていないため、この期間に内務省の直轄工事で実施された「中川改修」⁽¹¹⁾によって消滅させられたと推測できる。昭和二十六年（1951）八月一日、当時の大相模村（旧千足村）と、吉川町（旧木売村）の境界が、中川の流路のほぼ中央部に定まり、「中嶋」の存在した場所の多くは、対岸の吉川町に併合され⁽¹²⁾、翌昭和二十七年（1952）、吉川町大字 共保きょうほという新地名が誕生し⁽¹³⁾、さらに、現在の吉川市大字中川台、木売二丁目などの地名へ改称されている。

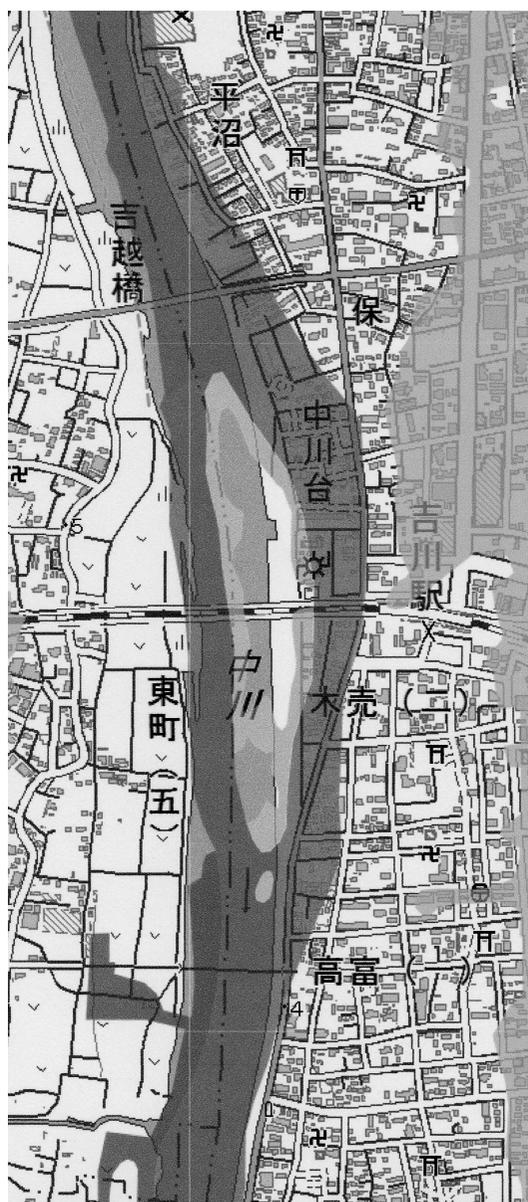
註

- (1)「明治前期測量 二万分の一 フランス式彩色地図
—第一軍管地方二万分一迅速測図—埼玉県武蔵国南埼玉郡大口村及黒谷村近傍村落」
- (2) (1973)『越谷市史 第三卷 史料一』越谷市役所 897-898
- (3) (1987)「付図」『八潮市史 史料編 近世2』八潮市役所
- (4)資料番号 26 江戸期「武蔵東部河川流域絵図」No. 10 越谷市立図書館蔵
- (5)註(1)「埼玉県武蔵国北葛飾郡吉川村南埼玉郡増森村及近傍村落」

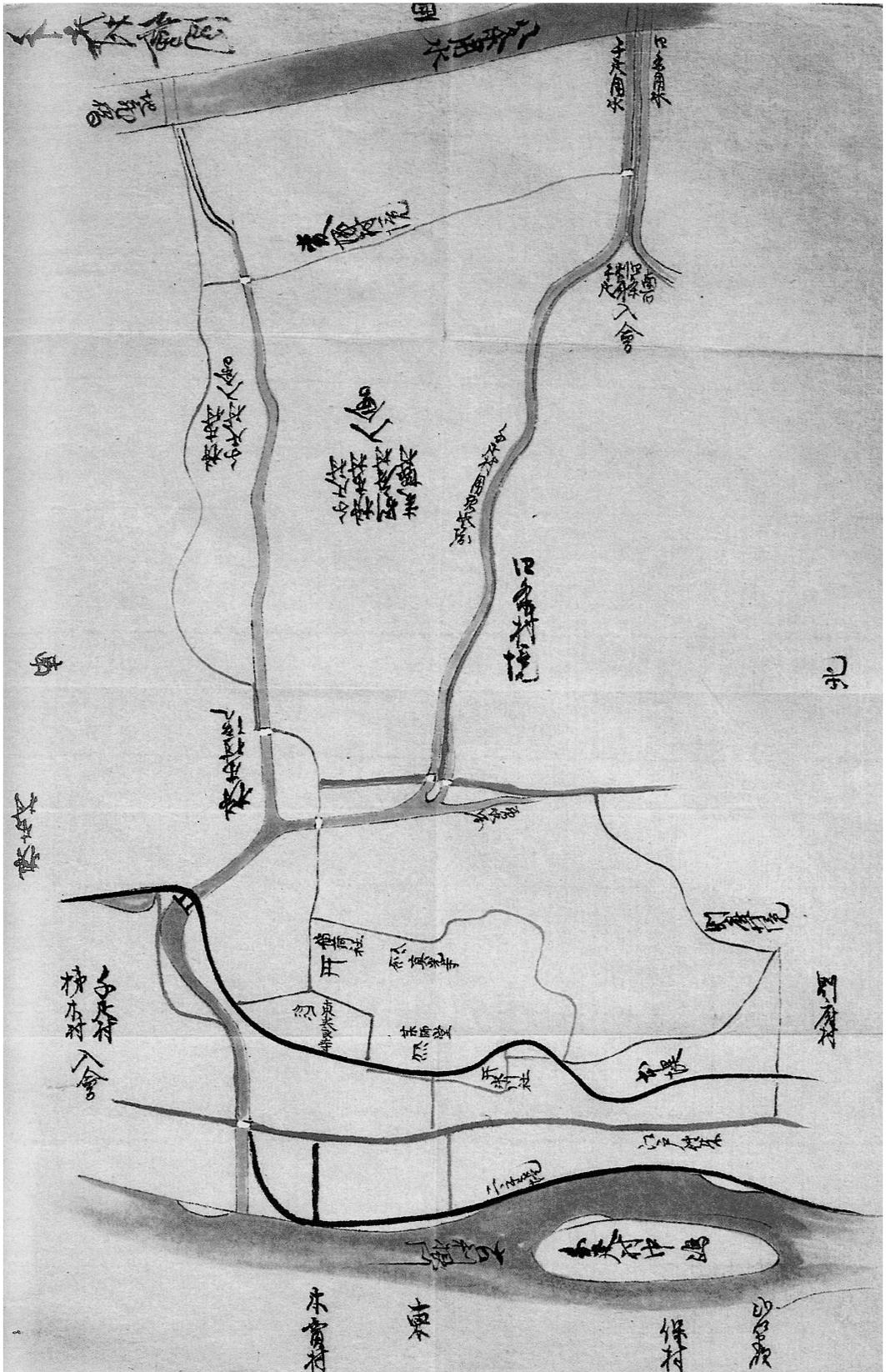
- (6) 埼玉県編 (1954) 『武蔵国郡村誌 第 11 卷』 埼玉県立図書館 72
 (7) 「旧土地台帳」の「千足村一番地」から「同一四一八番地の二」までを閲覧した結果、
 旧千足村字中嶋耕地は、「番外地（無番地・無地番）」であったことが判明した。
 (8) 中山正則 (1993) 『中川水系 III 人文』 埼玉県 482
 (9) 埼玉県地域総合調査会編 (1980) 「付図」 『埼玉県市町村誌 第 19 卷』
 埼玉県教育委員会
 (10) 五万分一地形図 東京一号「野田」大日本帝国陸地測量部 (昭和六年九月三十日発行)
 (11) 吉本富男 (1993) 『中川水系 III 人文』 埼玉県 402-408
 (12) 註(9) 163
 (13) 竹内理三編(1980) 『角川日本地名大辞典 11 埼玉』 角川書店 324
 (14) (2017) 『吉川市史 通史編 2 』 吉川市 386



「明治前期測量 二万分の一 フランス式彩色地図
 —第一軍管地方二万分一迅速測図—
 埼玉県武蔵国北葛飾郡吉川村南埼玉郡増森村
 及近傍村落」から引用して加工



国土院「地理院地図(電子国土 Web)」
 主題図「明治期の低湿地」
 から引用して加工



天保七年(1836)原図「千疋村絵図」
 八潮市史編さん委員会編(1987)『八潮市史 史料編 近世Ⅱ』八潮市役所から引用

試論

「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」は

「二猿付き庚申塔」である可能性が高い

秦野 秀明

はじめに

旧・武蔵国埼玉郡別府村（現・越谷市東町）金剛寺⁽¹⁾の参道脇にある「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」は、昭和四十四年発行の『越谷市金石資料集』⁽²⁾、平成二十七年二月発行の『大相模地区 旧南百・四条・千足村石仏 平成二十七年二月改訂』（以下『石仏』と記載）⁽³⁾の両資料において「二童子付き」の庚申塔として説明されている。

また、『石仏』⁽³⁾では以下のような説明も記載されている。

「二童子が刻まれているのはとても珍しい。

青面金剛の姿は「陀羅尼集経」で説かれているが、その中で青面金剛の両脇には童子が一人ずついるとされている。

この「陀羅尼集経」に影響されて二童子が描かれたのであろう」

『石仏』⁽³⁾で紹介されている「青面金剛」の「儀軌」で

ある「陀羅尼集経」の出典を正確に示せば、「大青面金剛呪法」『仏説陀羅尼集経・巻第九・金剛部下』⁽⁴⁾であり、「二童子」に関する部分は以下のように記載されている。

「其像左右兩邊各當作一青衣童子髮髻兩角手執香鑪」

以上の前提で、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」を考察した上で、果たして「二童子」として説明されてきた彫像主体が妥当であるか否かの検証を試みる。

写真 1 A



写真 1 B



「二童子」

「儀軌」で規定された「二童子」は前記のように、

- ①衣服は「青い衣」を着る
 - ②髪型は「両角（総角（あげまき）？）」で「髻（みずら）」
 - ③手には「香鑪（香炉）」を執る
- である。

江戸時代前期の寛文年間（一六六一〜七二）には存在していた「四天王寺のお札」、「金輪院の掛軸」、「大津絵」などで描かれる「二童子」は、管見の限り「儀軌」の規定に忠実である。

大畠 洋一氏の「青面金剛進化論 通説」⁽⁵⁾によれば、これらの「四天王寺のお札」、「金輪院の掛軸」、「大津絵」などで描かれる「青面金剛」や「二童子」などをモデルとして、寛文元年（一六六一）から寛文四年（一六六四）にかけて、江戸近郊に「4基」の「青面金剛像庚申塔」が造立されたと推定されている。

その「4基」で表現された「二童子」の姿は、石仏としての制約がある①の「青い衣」の「青色」以外、①②③の全てが、「儀軌」の規定に忠実である。

以上のような寛文年間（一六六一〜七二）における江戸近

郊の様相を基に、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」の「二童子」を改めて観察すると、

- ①衣服を着ているようには見えない
- ②髪型に相当する表現には見えない
- ③手には「香鑪（香炉）」を執るようには見えない

造形であり、下腹の出た体型は「童子」には見え、
「儀軌」では「二童子」の「姿勢」は規定されていないが、管見の限り「立ち姿」でない「胡坐をかいた」姿勢は、この「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」以外に存在しないと推定される。



写真 3 A

写真 3 B



写真 2 A

写真 2 B



「二猿」

松村 雄介氏の定義⁽⁶⁾による「大曲型青面金剛像庚申塔」7基は、承応二年（一六五三）から明暦四年（一六五八）（1基の造立時期は不明）にかけて造立され、その全てが「二猿」付きである。

この「大曲型青面金剛像庚申塔」に見られるように、寛文年間（一六六一〜七二）前後の関東における「庚申塔」においては、表現される「猿」の数は後の時期の標準となる「三猿」だけではなく、「二猿」の場合もあつたことが判る。



写真 4 A

写真 5 A



写真 4 B

写真 5 B



結びにかえて

寛文年間（一六六一〜七二）及びそれ以前の江戸近郊を含む関東における「庚申塔」の状況を鑑み、加えて「儀軌」で規定された「二童子」を基に考察した結果、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」で表現される彫像主体は、「二童子」ではなく「二猿」であると解釈することが、最も妥当であると推定した。

つまり、「寛文二年（一六六二）二童子付き庚申塔」ではなく、「寛文二年（一六六二）二猿付き庚申塔」である可能性が高いと推定した。

尚、石造物の「正面」上部には梵字の「バク」が刻まれており、主尊が「釈迦如来」の庚申塔でもある。

注

- (1) 真言宗豊山派・稻荷山金剛寺
埼玉県越谷市東町3丁目354
- (2) 越谷市史編さん室編（一九六九）『越谷市金石資料集』
越谷市史編さん室
- (3) 加藤 幸一（二〇一五）

『大相模地区 旧南百・四条・千疋村石仏
平成二十七年二月改訂』（越谷市立図書館蔵）

「正面」

寛文二寅年

(童子)

□左エ門
三左エ門
專右エ門

施主

□兵衛

(梵字バク) 奉供養庚申二世安楽所願成就所

仁□□

敬白

佐右門

十月十五日

(童子)

□八右門

兵三良

三良衛門

小右門



▲ 梵字バク

(4) 「大青面金剛呪法」『陀羅尼集経・第九』

「SAT大正新脩大藏経テキストデータベース」

2018版 (SAT 2018)」

<https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/>

[master30.php](https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php)

(5) 大島 洋一 「青面金剛進化論 通説」

<http://home.catv-yokohama.ne.jp/66/tok53/>

[sekibutu/SekiRon2010/syomen/syomen01.htm](http://home.catv-yokohama.ne.jp/66/tok53/sekibutu/SekiRon2010/syomen/syomen01.htm)

(6) 石川 博司 (一九八五) 『石仏研究ハンドブック』

雄山閣出版 pp.142-145

添付写真

写真1 A (移転前)

「寛文二年(一六六二)二童子付き庚申塔」

撮影 (二〇〇八年六月二十八日)

写真1 B (移転後)

「寛文二年(一六六二)二童子付き庚申塔」

撮影 (二〇二一年四月七日)

写真2 A・写真2 B

埼玉県所沢市東町「庚申堂」

「寛文三年(一六六三)青面金剛像庚申塔」(二童子付き)

撮影 (二〇二一年十月二日)

(一猿付き)

写真3 A・写真3 B

埼玉県さいたま市南区広ヶ谷戸

「寛文四年(一六六四)青面金剛像庚申塔」(二童子付き)

撮影 (二〇二一年十月四日)

(二猿付き)

写真4 A・写真4 B

神奈川県茅ヶ崎市行谷「金山神社」

「承応四年(一六五五)青面金剛像庚申塔」(二猿付き)

撮影 (二〇一九四年三月二十四日)

写真5 A・写真5 B

神奈川県茅ヶ崎市十間坂「神明宮」

「明暦四年(一六五八)青面金剛像庚申塔」(二猿付き)

撮影 (二〇一四年二月十二日)



▲埼玉県越谷市東町「金剛院」
「寛文二年（1662）二童子付き庚申塔」
※「二童子」ではなく、「**二猿**」付きの可能性が高い
撮影：2021年4月7日

▼奈良県大和郡山市小泉町「金輪院」
「掛軸」における「**二童子**」
※ご住職のご厚意により特別のご許可を得て撮影
撮影：2014年5月3日

